初蝶

初蝶は
春を掌(つかさど)る佐保姫からの
可憐な絵手紙かも知れません

早春の　きりっと晴れた空へ舞い上がり
鹿仔斑(かのこまだら)に雪残る渓(たに)をよぎり
びっしりとハコベの萌え出た堤を掠め
赤い前垂れがお似合いの地蔵尊へちらと流し目くれたりして
ふらり　ひらりと　人里に現れた彼女――
春を報せる可愛い絵手紙には　切手のつもりか
鮮やかな瑠璃色の紋が黄色の翅に描かれています
それを忙(せわ)しなく上下左右に弾ませながら
民家の門や生垣越しに　今にも訪れそうな
仕ぐさだけして通り過ぎるのです
一見気まぐれそうな彼女ですが
でも　あれこれと行き先を考えているのでしょう　菜種ほどの小さな頭の中で
「先ずは出戻りのあの娘さんにしようか
今日も窓辺でぼんやり空を眺めているかしら
それとも　天涯孤独な御老人を見舞おうかな
希望の代りに小さな菫の鉢など置いたベランダを賑わせてあげるために」

でも蝶さん　薄幸なあの二人だけでなく
みんなみんな君を待っているんだよ
まだ風の冷たいなか　素晴しい季節の到来を告げに来る――初蝶いわば
空を舞う絵手紙を一日千春の思いで

さて　皆さんも一筆　否　ひとひら書いてみては如何？
そして　小さな結び文を空へ放てば
美しい蝶になってお望みの宛先へ届くかも知れません

そう　そういう季節なんですよ　これからは……

逝く秋に

逝く秋の空は
途方もなく大きくて深い
洞穴(ほらあな)のようだ
そして　そこに漂う
ひとひらの白い雲ほど
あざやかな弔花はあるまい

時は　流れ
いとしい人は去り……

逝く秋を悼む私のこころは
深い傷のようだ

それを包み　癒やすには
あのひとの愛ほどに
優しい繃帯(ほうたい)は　ないのに――

熊沢　雅晴
（くまざわ　まさはる）
神奈川県平塚市在住
七十七歳（一九三六年生まれ）
無職（元　教員）